

春風秋霜

5月号

平成31年4月26日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 保護者からの手紙

書類の整理をしていたら、保護者からの感謝の手紙が見つかりました。その内容は、静岡から六合小学校に転校してきた子供の保護者からのものでした。

その手紙には、不安を抱えての転校だったのに、転校前日に教頭先生からクラスと番号、担任名を教えてもらったこと、転校当日に校長先生が親より先に子供に対し、しゃがんで丁寧に挨拶をしてくれたこと、不登校担当の先生がずっと寄り添ってくれたこと、転入後も担任から丁寧な子供の様子の連絡がある等、感謝の言葉が述べられていました。

保護者は、六合小学校の対応から「島田市は転校生に対してこんなに手厚くしてくださるのか」と島田市の教育までも評価しています。教職員の少しの心配りが、学校や島田市の評価につながり、教育への信頼につながるということをこの手紙は教えてくれました。各学校でも参考にさせていただきたいと思います。

2 猿舞を見て

静岡県指定の無形文化財になっている東光寺の猿舞が4月13日（土）に行われました。神事の後に天狗に先導され神輿が急な坂道を降りる様子や猿の面を被った子供の舞、参加者が紙垂のついた榊の小枝を大事に持ち帰る様子など、興味深い祭りでした。

このような伝統文化を継承する上での課題は、子供の減少をはじめとした後継者不足です。祭りの役員は、例年なら大きなみこしが山を降りるのに、担ぎ手の高齢化等により小さなみこしに変更したと言っていました。

六合小学校では、4年生約70人が見学に来ていました。素晴らしい伝統文化を一地区のものとして大切に、見学する姿勢には感謝です。移動のためのバスの手配や土曜日なので勤務の問題などと、見学するための課題はあったと思いますが、集中して見学する子供の様子を見てうれしくなりました。

今年は、島田大祭の年です。地踊りなどに参加したり、見学したりする子供が増えることを願っています。子供たちが参加しやすい配慮をお願いします。また、中学校では5月に地域探訪を行う学校があると思います。見学の視点を明確にし、質の高い探訪にさせていただきたいと思います。諏訪原城ビジターセンターも完成したので、諏訪原城跡の見学も充実するでしょう。島田を理解し、島田を好きな子供を増やして欲しいと思います。



3 教育委員会の提言について

今月になって複数の保護者から「種を撒きました」「花の苗を植えました」という話を聞きました。教育委員会の提言を実践している方がいることをうれしく思いました。

この提言を出すにあたり、私は「虐待や体罰を止める内容の提言にしたい」と教育委員の皆様へ提案したところ、「〇〇しない」という提言は、「教育委員会の提言にふさわしくない」という意見も出され、春休みや新学期を迎える時期ということもあり、親子で体験したり、会話したりできるような内容にということになりました。

『家族で種をまいてみませんか』の提言には、親子で一緒に体験する中で、家族の会話が増え、親子の関係が深まればという思いが込められています。植物の栽培には時間がかかるし、枯らしてしまうこともあります。この体験を失敗で終わらせないために、複数のものを栽培することも勧めています。

保護者には、失敗を叱るよりも失敗を乗り越えるための予備を準備し、子供が成功体験を味わえるように伝えて欲しいと思います。親子で楽しむ姿が増えることを願っていますので、学級懇談会や学級便りの話題の一つにさせていただけたらと思います。

4 学校教育目標の広報について

最近、保護者や地域の皆様の前で、これからの社会に求められる力や、今後の教育について話をする機会が複数ありました。私は、AI やロボットの発展による職種の変化や外国人と触れ合うことが多くなる社会に向け、どんな力が大切になるかについて話をしてきました。その中で感じたことは、今の教育の課題（いじめや不登校など）については理解していただけるものの、これからの変化する社会に生きる子供たちに求められる力については、なかなか理解していただけないということです。

各学校の教育目標は、これからの社会に生きる子供たちに求められる力を考えて作り上げられたと思います。当然、授業改善もその方向を向いているはずですが、授業参観会や学級便りなどを活用し、学校が育てようとしている子供の力や、文部科学省が求める子供像についても説明をお願いいたします。また、子供たちにもこれから何が大切になるかを理解させて欲しいと思います。

肘かけ椅子

磯貝 隆啓 教育委員

「Kさんのこと」

昨年初夏、薄暮の河川敷グラウンドをひとり懸命に走る少女がいました。市内の中学3年生 K さんです。陸上部を引退したと言っていました、「お、今日もやっているな」と感心してその走り去る後ろ姿を眺めながら、私もあとひと踏ん張りとして後を追いました。でも、彼女との距離はどんどん広がっていきました。

K さんは、私の勤務の関係でたまたま知り合った中学生です。複雑な家庭環境に育った母子家庭の子供です。先日の学校訪問では、偶然にも K さんのクラスの英語授業を拝見しました。それは、グループに分かれて ALT の先生に英語で質問する時間でしたが、K さんはグループの端っこで黙って鉛筆を握りしめているだけでした。私は、彼女に「少し勇気を出して ALT の先生に質問したら」と声をかけてみました。ところが、彼女はますますうつむいてしまい、手をぎゅっと握ったままです。ちょっとまずかったかなと反省しているうちに、次のクラスに移動しなければなりません。どうやら余計なことをしてしまったようです。

人は誰でも得意不得意がありますが、K さんは英語が苦手ようです。中学から始まった ALT の英語はちょっと難しいかな。でもいいんだよ、K さん。英語なんか必要な人や好きな人がやればいいんだから。自分の得意分野、そう陸上競技でがんばればいいんだから。グラウンドでは陸上競技を楽しむ小学生たちに一生懸命声掛けをしたり、手ほどきをしたりしている K さんの姿も時々見かけていました。今日も K さんに会えるだろうか。私は車から降りて、ジョギングシューズに履き替え、胸一杯の空気を吸い込みました。